

「四千人の給食」

マルコの福音書 8:1～10

はじめに

神様は私たちに、何のために聖書をお与えになったのでしょうか。私たちはなぜ聖書を読み、これを学ばなければならないのでしょうか。それは神の国を求めさせるためです。神の国とは何か、それはどのようにして建てられ、実現するのかということを知らせるためであり、それによって私たちの心と思いとが、ただ神の国にのみ向けられ、この世の様々な思い煩い、些末事から目を離すためです。もし聖書を学ぶと言いながら、なおこの世に、また自分のことに目を留めるなら、それは神の国を見失うことになり、聖書をお与えになった神の御心を理解できないという事態に陥ることになります。

近年、世界情勢を聖書の御言葉で説く、また歴史事実を聖書の預言に結びつけるようなメッセージが、インターネット上に急増しています。これらは聖書の真実性、現実的信憑性を主張するという点においては、ある程度は有益なことなのかもしれません。しかし実際のところ「聖書はすごい本だ、真実な神の御言葉だ」などとうたうばかりで、肝心の神の国についてはほとんど語られることがなく、神の国についての詳しい説明も示唆もないまま終わっているのです。ですから相も変わらず神の国は、私たちの間で依然ぼんやりとした、目を留めづらいもの、よくわからないものとなったままとなっています。これでは結果的に、聞く者をただいたずらに恐れさせるだけです。神は私たちに、永遠の喜びと楽しみ、平安と祝福に満ちた神の国をお与えになりたいのです。私たちの中で、誰が中身のわからないプレゼントを喜んだり、また求めたりするのでしょうか。喜ぶどころかそれは逆に恐怖に感じられてしまいます。

終わりの時代、世の終わり、このような言葉を聞くと多くの人は恐れと不安を感じます。それは神の国を見ていない、いや見えていないからです。聖書は神の国のすばらしさを知り、これを喜び迎え、待ち望むことができるように、その中身について表された書物なのです。聖書とは本来、最近の世界情勢や、過去の歴史を考察するためのものではありません。ましてや私たちの小さな日常を、より快適なもの、成功的なものにするための本などでは決してありません。罪による人間の歴史、時代や、今のこの世の支配者である悪魔の業に目を留めるためのものなどではないのです。聖書は神のご計画の、その完成である神の国に目を留め、待ち望み、その実際の到来の時に備えるためのものなのです。

「神の国とは何か」、初臨のイエシュアこそがまさにこのテーマ、この視点をもって語られ、また行動され、この地上を歩まれました。聖書全体、この宇宙全体を知り尽くしておられる御方が、ただこの一事に徹されたのです。それは御父である神がそれを望まれたからです。それなのに私たちはこれ以外のテーマで、神の国以外の視点で聖書を学ぶ必要性がどこにあるのでしょうか。どんなに深く意味のあるものに見える事実もメッセージも、この「神の国」を私たちが求めることに至らせない教えはすべて無益であり無意味です。しかし実際のところ、聖書には優れた知恵や知識、思考や生き方をもたらす力があることも事実です。しかし私たちはそれらばかりを求めるあまり、神の国を求めることについての意識が忘れ去られ、ほとんど欠落しているような状態となっているのです。

私たちが宣べ伝えなければならないのはこの神の国の福音です。だとするならば、神の国を知らずして、私たち自身がこれを求めずして、どうして宣べ伝えることができるのでしょうか。まず神の国を、ただ神の国のみを求めてまいりましょう。御霊の助けがありますように。

1. 人里離れたところ

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:1 そのころ、再び大勢の群衆が集まっていた。食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼んで言われた。

8:2 「かわいそうに、この群衆はすでに三日間わたしとともにいて、食べる物を持っていないのです。

8:3 空腹のまま家に帰らせたら、途中で動けなくなります。遠くから来ている人もいます。」

8:4 弟子たちは答えた。「こんな人里離れたところで、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができるでしょう。」

今日取りあげる箇所は「四千人の給食の奇蹟」と呼ばれる出来事です。まずイエシュアのみもとに大勢の群衆が集まっていたという事実が描かれています。その場所は「人里離れたところ」でした。ヘブル語ではミドゥパール(מִדְּבָרִים)、本来は「荒野」と訳された言葉がここに使われています。この言葉の最初の言及は創世記 21:21 に記された、パランの荒野という地を指し示しています。

【新改訳 2017】 創世記

21:17 神は少年の声を聞かれ、神の使いは天からハガルを呼んで言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れてはいけない。神が、あそこにいる少年の声を聞かれたからだ。

21:18 立って、あの少年を起こし、あなたの腕でしっかり抱きなさい。わたしは、あの子を大いなる国民とする。」

21:20 神が少年とともにおられたので、彼は成長し、荒野に住んで、弓を射る者となった。

21:21 彼はパランの荒野に住んだ。彼の母は、エジプトの地から彼のために妻を迎えた。

イスラエルの父祖アブラハムとその妻サラには、「ハガル」という女奴隷がいました。その時不妊の女であったサラは彼女をアブラハムに与え、ハガルはそれによってイシュマエルという男の子を産みました。それがここに記された「少年、彼」のことです。この後サラは神の約束を得てイサクを産みます。神のご計画はアブラハムからこのイサク、そしてイスラエルへと受け継がれていくため、イシュマエルはアブラハムの家から離され、エジプト人と結婚し、彼の家系はイスラエルの子孫ではない民、すなわち異邦人となっていきます。しかし神はこのイシュマエルをお見捨てになつたわけではなく、彼の子孫もまた「大いなる国民とする」という約束を与えておられます。そんなイシュマエルが住んだ地、それが聖書で最初の「荒野」ミドゥパールです。ですからこの言葉は本来、**神に選ばれた異邦人**を指し示す言葉であると考えられます。この神に選ばれた異邦人とは一体誰か、それはイエシュアを信じる者として集められた、**私たち教会**以外には考えられません。ですからイエシュアのみもとに集まっていたこの「大勢の群衆」とは、私たち教会を表した「型」であると考えられます。イエシュアの弟子たちは「**こんな人里離れたところで、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができるでしょう。**」と言ってこの群衆を助けることはできないと考えました。この時の弟子たちの姿にイスラエルの民、ユダヤ人たちの異邦人に対する考え、姿勢が重なります。彼らは本来、異邦人は神に選ばれた民ではない、異教の民、偶像礼拝の民だから滅びるべきだと考えているからです。そんなイスラエルと異邦人の関係性が、ここでの弟子たちと、この大勢の群衆には表されていると考えられます。

ちなみにイエシュアはこの群衆が「三日間わたしとともにいて、食べる物を持っていない」と言われましたが、この「三日間」とはイエシュアが十字架にかかれ、死んで墓の中におられた時間と同じです。私たち教会、クリスチャンはみなイエシュアとともに死に、葬られた存在であると記されています。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙

6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。

また「食べる物」とは神の命令、律法を指し示していると考えられます。律法とは本来、モーセを通じてイスラエルの民だけに与えられたものです。彼らは今日もなお、この律法を守り行うことによって罪が赦され、救われる、神に受け入れられると考えていますが、上記のように私たち教会はキリストすなわちメシアであるイエシュアの十字架の死によって救われるのです。ですから「この群衆はすでに三日間わたしとともにいて、食べる物を持っていない」というイエシュアのこの言葉にも、律法の行いによってではなく、イエシュアの十字架の死によって罪赦された者となった、私たち異邦人の教会が表されていると考えられます。

そしてイエシュアはこの時の群衆に対して表されたように「かわいそうに」という大きなあわれみをもって、私たちを救おうと、みもとに集めてくださるのです。この「大勢の群衆が集まっていた」という箇所に使われている「集める」という意味のヘブル語カーヴァツ(קָבַץ)は初め、以下の出来事の中で使われました。

【新改訳 2017】創世記

41:29 今すぐ、エジプト全土に七年間の大豊作が訪れようとしています。

41:30 その後、七年間の飢饉が起こり、エジプトの地で豊作のことはすべて忘れられます。飢饉が地を荒れ果てさせ、

41:31 この地の豊作は、後に来る飢饉のため、跡も分からなくなります。その飢饉が非常に激しいからです…

41:34 ファラオは、国中に監督官を任命するよう、行動を起こされますように。豊作の七年間に、エジプトの地の収穫の五分の一を徴収させるためです。

41:35 彼らに、これからの豊作の年のあらゆる食糧をすべて集めさせ、ファラオの権威のもとに、町々に穀物を蓄えさせるのです。彼らは保管し、

41:36 その食糧は、エジプトの地に起こる七年の飢饉のために、国の蓄えとなります。そうすれば、この地は飢饉で滅びることがないでしょう。」

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブの子ヨセフが、エジプトのファラオの見た夢の意味を解き明かし時のものです。七年間の大飢饉、その前に起こる七年間の大豊作、この時の収穫物を「集めさせ」蓄えること、ここに聖書で最初のカーヴァツがあります。大飢饉、非常に大きな災いの、その前に集められるこ

と、それによって「滅びることがない」ようにされること、それがカーヴァツの持つ本来の意味であると考えられます。ですからイエシュアを求めて荒野、ミドゥバルに「大勢の群衆が集まっていた」というこの記述には、大きな災い、患難が来るその前に、イエシュアによってカーヴァツ「集められる」異邦人、私たち教会の「型」が表されていると考えられます。すなわちここには「世の終わりの大患難の前に起こる、イエシュアの空中再臨、教会の携挙」という神のご計画が表されていると考えられます。

このイエシュアの空中再臨、教会の携挙については、今日いくつかの解釈があります。またこのような出来事自体起こらないという説もあります。今私が述べたものは、携挙は大患難の前に起こるとする「患難前携挙説」です。しかしこの他に「患難中携挙説」、「患難末期説」、「患難後説」があり、そして携挙の事実そのものを否定する「無携挙説」があり、全部で五つの解釈があります。興味深いことに先ほど挙げた創世記 41 章の 35 節に「豊作の七年間に、…収穫の五分之一を徴収」という記述があり、もしこれが携挙に関する預言であるとするならば、イエシュアの空中再臨の時にカーヴァツ「集められる」教会は、地上のすべての教会ではなく、全教会の「五分之一」であり、それは「患難前携挙説」の信仰を持った教会、クリスチャンだけであるということが表されていると考えることができます。

2. 七つのパン

【新改訳 2017】マルコの福音書

8:5 すると、イエスはお尋ねになった。「パンはいくつありますか。」弟子たちは「七つあります」と答えた。

8:6 すると、イエスは群衆に地面に座るように命じられた。それから七つのパンを取り、感謝の祈りをささげてからそれを裂き、配るようにと弟子たちにお与えになった。弟子たちはそれを群衆に配った。

「七つ、七」はヘブル語でシェヴァ(שֶׁבַע)と言いますが、これが動詞になるとシャーヴァ(שָׁוַע)という発音になり、「誓う」という異なった意味になります。最初の言及は創世記 21 章です。

【新改訳 2017】創世記

21:22 そのころ、アビメレクとその軍の長ピコルがアブラハムに言った。「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられます。

21:23 それで今、ここで神によって私に誓ってください。私と私の子孫を裏切らないと。そして、私があなたに示した誠意にふさわしく、私にも、またあなたが寄留しているこの土地に対しても、誠意を示してください。」

21:24 アブラハムは「私は誓います」と言った。

21:27 そこでアブラハムは羊と牛を取って、アビメレクに与えた。こうして二人は契約を結んだ。

21:28 アブラハムは、羊の群れから、七匹の雌の子羊を別にしておいた。

21:29 アビメレクはアブラハムに言った。「今、あなたが別にしたこの七匹の雌の子羊は、何のためのものですか。」

21:30 アブラハムは言った。「私がこの井戸を掘ったという証拠になるように、七匹の雌の子羊を私の手から受け取ってください。」

21:31 それゆえ、その場所はベエル・シェバと呼ばれた。彼ら二人がそこで誓ったからである。

この記述は、イスラエルの父祖アブラハムが、ペリシテ人の地、ゲラルの王アビメレクと契約、和平条約を結び、お互いに「誠意を示し」合うことを誓い合った場面です。ペリシテ人すなわち異邦人であるアビメレクは、アブラハムに「あなたが何をしても、神はあなたとともにおられます」と言い、アブラハムが神に選ばれた存在であることを認め、その恩恵に与るために彼のもとにやって来たのです。ここで「神によって私に誓ってください」という箇所には聖書で最初のシャーヴアがあり、アブラハムとアビメレクはシェヴァ、すなわち「七」匹の雌の子羊をもってシャーヴア「誓い」合いました。ですから「七」という意味のシェヴァには本来、アブラハムの子孫すなわちイスラエルと、ペリシテ人すなわち異邦人が、お互いの違いを認めつつ祝福し合う関係を築くという状態、状況が表されていると考えられ、イエシュアの指示によって弟子たちが用意したこの「七つ」のパンには、神の国におけるイスラエルと異邦人の友好的な関係性が表されていると考えられます。このように、イエシュアがイスラエルの王となる「メシア王国」また「千年王国」とも呼ばれる神の国は、イスラエルの民と異邦人の国々という区別が明らかに存在します。しかしそれは、神がイスラエルだけを祝福するという意味ではありません。神がイスラエルによって異邦人を、すなわち地上に生きるすべての人を祝福するというものです。すなわちこう記されているとおりです。

【新改訳 2017】創世記

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

このように、イスラエルも異邦人もともに神の祝福に与る世界、それが神の国です。ですから私たち異邦人が、このイスラエルを軽視、あるいは否定することは、神の国における神からのあらゆる祝福に与ることができないということになるのです。

3. 少しの小魚

【新改訳 2017】マルコの福音書

8:7 また、小魚が少しあったので、それについて神をほめたたえてから、これも配るように言われた。

また七つのパンのほかに小魚が「少しあった」とも記されています。ここにはメアット(מֵאֲטוֹ)という言葉が使われています。最初の言及が創世記 18:4 です。

【新改訳 2017】創世記

18:1 【主】は、マムレの櫨の木のところ、アブラハムに現れた。彼は、日の暑いころ、天幕の入り口に座っていた。

18:2 彼が目を上げて見ると、なんと、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはそれを見るなり、彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行き、地にひれ伏した。

18:3 彼は言った。「主よ。もしもよろしければ、どうか、しもべのところを素通りなさないでください。

18:4 水を少しばかり持って来させますから、足を洗って、この木の下でお休みください。

これはアブラハムの家に、主が人の形となって来られたという出来事です。彼は「水を少しばかり持って来させます」とあり、ここに聖書で最初のメアットが使われています。この当時の人々は客を自分の家に迎える際、このように足を洗うための水を用意することが常となっていました。ですからこのメアットには本来、主をお招きする、アブラハムの家にお迎えするという意味があると考えられます。イエシュアは弟子たちを通してこのメアット「少しあった」小魚も群衆に分け与えられました。この様子もまた私たち異邦人の教会が、イスラエルとともに主を、イエシュアをお迎えし、そしてともに住まう、ともに生きる特権が与えられるという、神の国のご計画が表されていると考えられます。

4. 四千人

【新改訳 2017】 マルコの福音書

8:8 群衆は食べて満腹した。そして余りのパン切れを取り集めると、七つのかごになった。

8:9 そこには、およそ四千人の人々がいた。それからイエスは彼らを解散させ、

8:10 すぐに弟子たちとともに舟に乗り、ダルマヌタ地方に行かれた。

「群衆は食べて満腹した」とあります。先ほど食べ物に律法を指し示していると述べましたが、ここで群衆が食べたように、神の国ではイスラエルの民だけでなく、異邦人にもこの律法を守ることが要求されます。神の国は律法すなわちモーセ五書とも呼ばれる創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記に記された掟、戒めを守り行う世界です。どんな楽しい遊び、交わりにも必ずルールがあるはずで、それを守ってこそお互いが楽しい時間を過ごすことができるように、神の国にもそれがあります。実際に今の私たちが日本という国の定めた法律の下にいます。これは一見窮屈なものにも感じられますが、私たちの安全を守るものでもあるはずで、神の国ではこの律法が私たち一人ひとりの中にしっかりと刻みこまれます。それが「群衆は食べて満腹した」という状況には表されていると考えられます。

また「七つ」のかご、ここでも再度「七」シェヴァが強調され、イスラエルと、イスラエルによって祝福される異邦人という神の国の内実が強調されていると考えられます。しかし何よりこの「七」という数は完全数と呼ばれ、神の御業、ご計画の完成を指し示す数です。

【新改訳 2017】 創世記

2:1 こうして天と地とその万象が完成した。

2:2 神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。

2:3 神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。

神の御業、そのご計画はイスラエルによってすべての国々が神の祝福に与る状態、環境となって完成となります。そのことが今日の箇所には強調されています。そして「そこには、およそ四千人の人々がいた」とあります。この「四千」、ヘブル語ではアルバアト(אַרְבַּעַת)アラーフーム(אַלְפִּים)と言い、「四」を意味するアルバ(אַרְבַּעַת)と「千」のエレフ(אַלְפִּים)の二つからなる言葉です。それぞれの最初の言及を見ましょう。

【新改訳 2017】創世記

2:10 一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。

【新改訳 2017】創世記

20:14 アビメレクは、羊の群れと牛の群れと、男女の奴隷たちを連れて来て、アブラハムに与え、またアブラハムの妻サラを彼に返した。

20:15 アビメレクは言った。「見なさい。私の領地があなたの前に広がっている。あなたの良いと思うところに住みなさい。」

20:16 サラに対しては、こう言った。「ここに、銀千枚をあなたの兄に与える。これはあなたにとって、また一緒にいるすべての人にとって、あなたを守るものとなるだろう。これであなたは、すべての人の前で正しいとされるだろう。」

「四」アルバは本来、エデンの園から流れ出る川が「四つ」に分かれ、全地が潤される様子、そして「千」エレフは、アブラハムに与えられた「銀千枚」によって彼が「すべての人の前で正しいとされる」ことを指し示した言葉であると考えられ、これらの意味を統合すると「四千」には、アブラハムと「一緒にいるすべての人」、すなわち彼の子孫であるイスラエルの民が、すべての異邦人の民族、国民の「前で正しいとされる」、すなわち神のお選びになった特別な民として認められること、そしてそのイスラエルの民によって地上のすべてが潤される、祝福されるようになるという神のご計画の完成である神の国の内実が、ここにも同じく指し示されていると考えられます。

そして「それからイエスは彼らを解散させ」たとありますが、ここに「解散させる」という意味で使われているシャーラハ(חַלַּח)は本来「手を伸ばす」と訳され、永遠の命を得ることを指し示す言葉です(創世記 3:22)。イエシュアの空中再臨で携挙される教会は、その時点で新しい身体、朽ちない身体、永遠に生きることができる身体に変えられます。私たちはその身体をもって神の国に入ります。その事実が、神のご計画の「型」がここには表されていると考えられます。

最後にイエシュアは弟子たちとともに「ダルマヌタ」(דַרְמָנוּטָא)という地に行かれたとありますが、これが一体どこなのかという地理的な場所については諸説あり、はっきりしません。聖書中にもここ一箇

所にしか出てきません。ヘブル語で表記してみましても、適当な言葉や意味を見つけることも難しく、いろいろと調べてはみましたが、明確な情報を得られませんでした。しかし情報不足という点で言うならば、私たちの持つ神の国についての情報もまだまだ微々たるものです。私たちは聖書からもっともっとこの神の国についての情報を引き出す必要があります。更に求めてまいりましょう。

今日の箇所は、荒野におられたイエシュアのみもとに集まって来た群衆に、携挙される教会の「型」があるという解釈のもとで述べましたので、最後にこの携挙についての直接的な聖書の預言を読み上げて終わりたいと思います。

【新改訳 2017】 I テサロニケ人への手紙

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

「これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。」聖書は、今日取りあげた「四千人の給食」の出来事の中にも、私たち教会が携挙の「ことばをもって互いに励まし合」うことができるようにしておられました。このように、私たちが励まし合うようにと記されている携挙についての御言葉は、この限りではなく、まだまだたくさんあります。このような形をもってこれからますます私たちが互いに励まし合っていくことができますように祈り求めてまいりましょう。聖霊の助けが豊かにありますように。